

十一月のテーマ

重圧をはねのける

プレッシャー

プレッシヤーがあるからこそ、人生はおもしろく、張り合

いもあり、愉快でもある。

圧力があるから、それに耐えるという張りが出てくるのであり、

圧迫があるから、それを跳ね返そうという気力が湧く。威圧感があるから、それを利用したり、また抗しようとするこちら側の姿勢も強く出てくるのではないか。

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載します。

丸山竹秋



え・浅妻健司

朝起きるのは寒い。温度のプレッシャーだ。それではいつまでもぬくぬくと寝ていて、それですむか。身体を動かすには物理的な力がある。それもプレッシャーだ。動かさないですめば、一番楽なのだ。しかしそれでは筋肉がたるんでしまう。朝寒くてもサツと起きて、寒さのプレッシャーを排し、洗面をし、仕事にかかる。そこにまず生きる張り合いが出てくる。いつもらくらくとしていたら、精神も身体もブヨブヨになってかえってダメになってしまう。

日常生活の中で自然に作られてくるプレッシャーはいくつもある。親子、夫婦関係からくるもの、嫁

姑、財産相続、病氣、満員電車など数えあげればきりがあるまい。それに職場や学校など仕事や勉強の上でも、いくらでもプレッシャーは出てくる。

人間社会とはさまざまなプレッシャーが、いつでも起こり、苦しみ、悩むようになっていっているのだ。問題はそうしたプレッシャーを、

いかに乗り越え、いかに活用して人生に深い喜びをもたらす工夫をし、前進するかである。毎日のように生ずる大、小のプレッシャーを、いかにわが身にこなして、養分に転ずるかである。

難しい時もある。押しつぶされそうになる時もある。しかし「問題はここだ。このプレッシャーから英知を導き出すのだ」と心にきざんで前進することである。

分をこえた大借金を背負って店もつぶれ、その日暮らしとなった。屋根裏に住み、食う物にも事欠くようになった。しかしまだこの身体がある。決心して清掃の仕事を始めた。まず道路のゴミを集め、落ちていたビニール袋につめ込んで「ありがとう、ゴミさんよ」と頭を下げる。それを実行しているうちに、見ていた人があって「うちの荷物を向こうに運んでくれ」と頼まれた。それがきっかけで正式に職につき、自殺をせずにすんだのである。似たような話はいくらでもある。

東京九段下でタチンボーという荷車押しをやって、それからそれへと仕事にありつき成功した大谷米太郎氏（二八八—一九六八）の苦心談を知らない人は多い。今を時めくホテル・ニューオータニを興（おこ）したのは、この大谷氏に他ならない。

普通一般にはプレッシャーを押しつけるのけようとしても、なかなか難しい。現に、ここに、こうしてあるプレッシャーなのだから、むしろそれを暖かく包み込んで、「ひとつ、よい知恵を授けてくれないか」と頭を下げて、そのプレッシャーに教えを乞うてみるのだ。将来がどうなるか、そんな不安は後まわしだ。プレッシャーこそ、もっともよい先生なのである。